

# そうだ、猫に聞いてみよう

「はじめに」の前に—問題はどこ?—

いきなりですが、想像してみてください。

ある朝、家を出ると近所のおじさんとおばさんが喧嘩をしています。

「あんたが猫に餌をやるから猫が増えて皆が迷惑してるんだ!!」とおじさんが怒鳴っています。

「猫が死んでもいいって言うの？」

!」おばあさんが言い返します。「可哀想だと思うなら自分の家の中で飼えばいいじゃないか!」、

「家にも猫がいるし、全部のノラ猫を家に入れるなんて無理よ!」「じゃあ餌なんかやるなよ!」「猫が可愛そうだと思わないの?!」…そして、またはじめに戻る。

ご近所の猫を巡る言い争いは、この「永遠のループ」に陥って数年が経っている。今日も決着がつく気配はない。そんなことを考えていたら、

「あなたは どう思う?!」

突然二人から意見を求められた。

あなたは、なんて答えますか——?

ここでの「問題」はなんのでしょうか。

迷惑なえさやりおばあさんでしょうか。

猫嫌いのおじさんでしょうか。

それとも猫の存在でしょうか。

あるいはもっと別のところにあるのでしょうか。

連載にあたって

私は昨年度まで、立命館大学大学院応用人間科学研究科対人援助学領域に在籍し、対人援助の視点から広義の「地域猫活動」の実践と研究を行ってきました。それと同時に、猫の視点から対人援助を再考してきました。大学院修了時に、「生存確認も含めて、対人援助学マガジン連載書いてみ!」とありがたい声掛けをいただき今回から書かせていただくことになりました。

システム論的な地域猫活動の理論や問題の捉え方、介入によって生じるシステムの循環や心理面の変化を私が実際に関わった事例を紹介しながら解説します。もう一つのテーマとして、活動の中で、猫から投げかけられた「生の現在」への「問い」を一緒に考えてもらいたいと思っています。



## I. 事例から

私が冒頭のような揉め事に初めて出くわしたのは、確か中学3年生か高校1年生の頃でした。犬の散歩コースの途中に、いつも猫が数匹いる家がありました。あの家の人はきっと猫が好きなんだろうな。猫、可愛いな。」と思って見ていたら、一緒に犬の散歩をしていた散歩仲間のおばちゃんが「あの家のじいちゃんがノラ猫に餌をあげているから猫が集まってくるのよ。もう迷惑だから保健所に連絡しようと思って!!」とプンプンしながら話してきます。犬のおばちゃんの家と、おじい

やんの家は道を挟んで向かい同士だ。

私は犬も猫も好きなので、この揉め事に巻き込まれて猫が保健所に連れて行かれてしまうなんて可哀想すぎるから何とかしたいと思った。そこで、後日おじいちゃんの家ピンポンし、「猫、可愛いですね、私も好きなんです。けど、ノラ猫にご飯あげると文句言われたりしませんか？堂々とご飯あげられるように、この子たち不妊去勢手術しちゃいませんか？手伝いますよ！」猫トークで仲良くなってから不妊手術の提案をした。すると、意外にもおじいちゃんはとても喜んでくれた。

私「おばちゃん、じいちゃんこの猫、不妊手術することにしたよ」

おばちゃん「不妊手術をしたってこれ以上増えないかもしれないけどさ、猫がいることに変わりはないんだろう？」

私「おばちゃん猫のどんなことに迷惑してるんだっけ？」

おばちゃん「ニャーニャー、ギャーギャーうるさいし、トイレの臭いが臭いんだよ。」

私「なら、大丈夫だよ！」

おばちゃん「??？」

## II. 問題の再焦点化

猫の二大苦情は「鳴き声」と「糞尿の臭い」です。この二つは、「発情期特有の行動」という共通点があります。猫は犬と違い待ち伏せ型のハンターです。倉庫なんかで身を潜め、穀物を食べに来たネズミを捕獲する。そういう習性を持っています（日本に猫がやってきたのも、奈良時代に中国からの貴重な経典をネズミが齧ってしまわないように、船に乗せられてきたのが始まりだと言われているそうですね）。待ち伏せするためには自分の臭いを消す必要があります。だから猫はトイレをした後、砂をかけて臭いを消す習性を持っています。臭いのは、発情期のマーキングです。スプレーのようにおしっこをシャッと壁や木に吹きかけます。それはそれは強烈です。鳴き声も同様です。

猫は普段わざわざ鳴いて自分の存在をアピールしません。うるさいのは、発情期の異性を求める鳴き声と、一番強烈なのは、オス同士の「鳴き合い」です。赤ちゃんが大癩癪を起しているのかと思ったら、猫だった。そんな経験はありませんか？猫はいきなり取っ組み合いの喧嘩をせずに、交互に鳴き合って強さを図ります。これで決着がつけば、傷つけ合うことはしません。結構平和的ですよ、でも30分にも及ぶ長期戦になることもあり、近所に住んでいる人からしたらとても迷惑な騒音です。

つまり、この二大苦情はどちらも発情期特有の行動であることから、不妊去勢手術を行うことで解消されてしまうんです。それでも、手術にお金をかけるくらいなら猫を殺処分するか、どっかほかの地域へ持って行って欲しいと考える過激派の方もおられます。でも、感情論抜きで、それは違います。なぜなら猫は縄張りを持つ生き物だからです。だから、猫を捕まえて殺処分しても、空いたスペースに外から猫がはいってきて、すぐ元通りです。不妊去勢手術が済んだ、人にとって共存しやすい猫が縄張りを張っていてくれることで、地域の平穏は維持されます。

そんなこんなで、プチご近所トラブルは鎮火されました。



## III-1. 問題の捉え方 —問題の本質を立体的に捉える—

さて、ここでの「問題」はなんだったのでしょうか。

猫の存在でも、餌やりさんの存在でも、猫に迷

惑している人の存在でもありません。  
ここでの問題は「猫の発情期特有の行動」です。  
だから、捕まえて、不妊去勢手術をして、元の場所に戻すことで、問題は解決することができました。実はこれ、「TNR」というちょっとした専門用語がある世界的な取り組みなんです。



©公益財団法人どうぶつ基金

でも今回は連載の初回なので、専門的な話の説明は次回以降にしたいと思います。

### III-2. 問題の捉え方 —悪者探しをしない—

ここでのポイントは原因究明をしていないところです。様々な要因が関わりあって、ある事象を生んでいる社会システムの中で、悪者探し（安易な原因の特定）は危険です。実際、何が原因で何が結果かなんて、分かりません。餌をやる人がいるから猫がいるのかもしれないし、猫がいるから餌をやる人がいるのかもしれない。マナーの悪い餌やりさんがいるから怒る人がいるのかもしれないし、怒る人がいるから隠れ隠れ餌をやることによってマナーの悪い餌やりさんになってしまっているのかもしれない。“誰が悪いのか”を永遠にぐるぐる議論するよりも、問題を解決してしまった方がよっぽど生産的だと思いますか？

### III-3. 問題の捉え方 —3つの視点—

上記の事例で、おばさんもおじいちゃんも“猫と自分”という二者関係の「ミクロな視点」を持って文句を言ったり、餌をあげたりとそれぞれ自由に行動していました。そういった、「猫、おじいちゃん、おばあちゃん、私」の四者が登場する事例を読んでいる皆さんは、関係性を客観的に捉えた「メゾな視点」で、見ていると言えるでしょう。次は、さらに目線あげて、広く日本を「マクロな視点」で見てもらいたいと思います。

その前に、ここで猫からの一つ目の「問い」が投げかけられます。

#### 猫からの問い1 不妊去勢手術の是非

上記の問題解決において必須なのが猫の不妊去勢手術である。しかし、不妊去勢手術は子孫を残すという猫が本来持つ本能を奪うことであるため、手術の是非を巡って大きな葛藤が生じる。人間の都合で、そこまでしていいのか。短命でも多くの子孫を残すことが猫にとっての幸せか、子孫を残せなくても平和に長生きすることが幸せか。

皆さんはどう考えるだろうか。皆さんにとっての幸せとはなんですか。「生きる」上で大切なことは何ですか。

手術の是非を巡ってひとまずの結論を出すためには、「マクロな視点」で日本の現状を捉えることが必要になってきます。

平成25年度の1年間で殺処分された猫の数は、全国で99,566頭にもものぼります。1日あたり273頭の猫が殺されているこの現状下で、不妊去勢手術の対案は「殺処分」であり、現状稼働している対策だということを理解する必要があります。したがって、「不妊去勢手術が可哀想ではないか」という論点の争点は「殺処分するよりも不妊去勢手術の方が可哀想なのか」となり、「本能を奪うこと」の是非を問う場合の争点は「生命を奪うこととどちらがためられるか」ということになります。殺処分を行っている行政機関を非難することもお門違いです。社会の一員である以上、自分自身も社会的な共犯関係にあると考えるべきでしょう。

哲学的な話でも、切り取られた道徳観でもなく、地に足の着いたリアルな共存について考えることが必要です。

正直に言って、不妊去勢手術をすることは可哀想だと思います。でも、「可愛い」と「可哀想」でこの大きな社会問題は解決することはできないのです。

### Ⅲ-4. 問題の捉え方—背後ストーリーの理解—

マイクロ、メゾ、マクロ、それぞれの視点で問題を捉えてもらいました。最後に、問題の「背後ストーリー」を見てもらうことで、問題を立体的に捉える作業が完了します。具体的には、猫を社会的文脈の中で捉える作業になります。

そもそも「猫」とはいったい何なのか。猫の歴史については諸説ありますが、古代エジプトにおいて、リビヤヤマネコを家畜化し、8世紀の奈良時代に仏教の伝来とともに経典をネズミから守る役目として日本に輸入されたのが始まりだと言われています。貴族のペットやネズミ番など様々な場面で猫は好まれてきました。また、ペストが大流行した明治時代に、1909年（明治42年）2月9日付の読売新聞社説ではペスト菌を媒介するノミを媒介するネズミを駆除するため警視庁がペスト予防のために猫を飼うことを奨励し、さらには住宅を廻り、猫を飼うよう説得するという内容が書かれていることから猫が意図的に広められた過去がわかります。



### IV. まとめ

長々と書いてしまいましたが、今回はまず「猫問題」を立体的にとらえてもらいたいと思い、つらつらと書かせていただきました。

☆問題の本質を立体的に捉えるポイントは

① 悪者探しをしない (Ⅲ-2)

② 3つの視点で捉える (Ⅲ-3)

- ・マイクロな視点で見えているものを理解する。
- ・メゾな視点で全体図を捉える
- ・マクロな視点で、社会システムの中で捉えなおす

③ 背後ストーリーを理解する (Ⅲ-4)

以上3点のステップが猫流問題の捉え方でした。

今回は、マイクロ、メゾ、マクロ、3つの視点を獲得していくことで、活動内容がどう変化していくのか、立命館大学猫の会事例を紹介しながら解説していきたいと思います。また、猫との関わりを通して生まれる学生の心理的な変化にも焦点を当て、大学猫活動の教育的意義にも触れられたらいいなと思っています。では、最後まで読んでくださってありがとうございました！

### 引用・参考文献

大石孝雄 (2013). ネコの動物学 東京大学出版  
山根明弘 (2007). わたしのノラネコ研究 さ・え・ら書房

武井誠 (2014). 美しき孤高のハンター世界の野生猫 (株)エディング出版編集部

環境省 (2015). 「平成25年 犬・猫の引取り及び負傷動物等の収容状況」

([http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2\\_data/statistics/dog-cat.html](http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/statistics/dog-cat.html), 2015年1月10日)

.....  
小池英梨子

2015年立命館大学応用人間科学研究科修了

現在は、公益財団法人どうぶつ基金に所属。

ご意見やご感想はこちら。[ekosame12@gmail.com](mailto:ekosame12@gmail.com)